

上演3 2026年7月30日（木）3校目 中部日本ブロック（愛知県） 聖霊高等学校 『BONE to be loved』	第50回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第72回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 敬和学園高等学校（新潟県） 田中 環
---	--

この作品を通して、相手に対するリスペクトの気持ちを持って譲り合い、手を取り合うことの大切さについて深く考えさせられた。また、同じものでもそれぞれの愛し方があって、一番なんてない！ということも強く感じさせる作品であった。

舞台美術がとにかく秀逸で、火葬場の収骨室が舞台上に完全再現されていた。壁紙や遺骨といった細部にまでこだわっていて、違和感なく物語に集中することができた。人の死に密接にかかわる場所でどんな物語が始まるのかと思ひながら見てみると、コメディのオンパレードで、故人の母親と妻が遺骨をめぐる争いを繰り広げる展開に、どこまで笑っていいのか少し躊躇してしまう時もあった。そんな前半のコミカルな内容から一転、終盤は、母親と妻が手を取り合い、一緒に言葉をかけながらお骨上げをしていく。そのシーンに多くの講評委員が涙し、言葉に詰まることも多かった。

同じ人のことを愛していても、「誰が一番愛しているか」なんて確かめる必要はない。人の人生は愛に満ちている。それと同時に、誰しもが愛をもって人に接している。だからこそ、そこに順位や優劣をつける必要はないと強く思わせてくれた。

この作品で象徴的に歌われていたのが「虹」である。幼い頃から父の背中で幾度となく聴き、一緒に歌った歌である。娘である美咲は、葬儀中に涙を見せず、親族が思い出を語っても、「覚えていない」という発言を繰り返し、父と向き合わない姿勢をとっていた。しかしそれは、美咲が思春期で父を避けたり言いたくないことを言ってしまったため、突然のことで気持ちが追いつかなかったからであった。ラストシーンで父の遺骨が入った骨壺を抱きしめ、「もっと話したいこといっぱいあった！」と本音をぶちまける場面については、観客からもすすり泣く声が漏れていた。しかし、この場面について講評委員の中では意見が分かれた。共感できる、自分も身内が亡くなった時、自分も何も言えない、何もできなかった後悔があり、それを代弁してくれたかのような台詞に胸がスツとしたという意見もあれば、本当に大切な人が突然亡くなってしまった状況下で、そんな話ができるだろうか。私はあんな風には泣けないかもしれないという意見もあった。

火葬場の収骨室は一番死を感じる場所であるにも関わらず、最後に遺骨が横たわっていた場所に光が差したことで、あたかも故人がそこにいるように感じ、生を強く感じさせる演出は、私たちに不思議な感覚を味わせてくれた。時間は元には戻らないし、今まで当たり前であった日常が突然、思い出に変わるということとは残酷なことである。



親しい人との別れは誰しもが必ず経験する事であり、身近な出来事だが、どこか遠いような感覚がある。しかしこの劇を通してもっと身近であること、だからこそ今の時間を大切にしたいと思った。そして、愛してくれる人への感謝を胸にこれからも生きていきたい。